

井上靖

YASUSI
NOUE

現代日本文学アルバム
— JAPANESE MODERN LITERATURE IN PHOTOS —

15

井上 靖

監修委員
川端康成
井上 靖

編集委員
足立卷一
奥野健男
尾崎秀樹
北 杜夫

現代日本文学アルバム

第15巻

井上 靖

昭和48年 8月 1日 初版発行

定価 2300円



発行人 古岡秀人

編集責任者 桜田 満

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4丁目40番5号

郵便番号 145 振替 東京 142930

電話 東京 (03) 720-1111(大代表)

印刷・製本 図書印刷株式会社

製函 永井紙器印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙 特種製紙株式会社

❖この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は、東京都大田区上池台4丁目40番5号 (〒145)
学研「ユーザー・サービス本部事務局」

現代日本文学アルバム係へ

電話は、東京 (03) 720-1111 内線 352, 353 か

東京 (03) 727-1600 へお願いします。

目次 YASUSHI INOUE

目次

井上靖文学へのいざない 5

井上靖文学紀行

『幼き日のこと』から『星と祭』まで 足立 卷一 69
——詩と自伝的作品を中心に——

井上靖文学旅行ガイド 涌田 佑 101

井上靖の素顔 117

井上靖とその時代……………福田 宏年 181

井上靖主要作品鑑賞小辞典……………巖谷 大四 213

年譜……………福田 宏年 229

著作目録……………福田 宏年 243

主要参考文献……………紅野 敏郎 245

写真（「井上靖の素顔」の一部）
V・アンチーピン
土門 拳

林 忠彦
二村次郎
三留理男

編集スタッフ
編集責任
桜田 満
編集担当
大和 浩
校正
須山康邦

資料提供
足立巻一
渥美静一
安保久武
石井 彰
石原国利
石渡清之助
井上隆夫
井上宗和
井上 靖
木本義一
斎藤勝久
露木 豊
道正太郎
中西 浩
濱谷 浩
福田宏年
間宮精一
宮崎健三

石川県立郷土資料館
オリオンプレス
角川書店
共同通信社
京都大学新聞
財団法人 博物館明治村
産業経済新聞社
主婦と生活社
松竹大谷図書館
市立旭川郷土博物館
新潮社
SCALA-ORIONPRESS
中日新聞東京本社
TBS テレビ
日本近代文学館
日本経済新聞社
ノーボスチ通信社
浜松北高等学校
文藝春秋
毎日新聞社
読売新聞社

写真
鈴木健夫
榎本時雄
山本成夫
大隅隆章
石井 馨
谷津富夫
寺久保信哉

地図製作
玉木図版社

朝日新聞社
石川近代文学館

（五十音順敬称略）

装幀 大川泰央

レイアウト 大川泰央

井上靖文学へのいざない



靖のふるさと 静岡県・伊豆天城山麓の湯ヶ島

しろばんば

洪作^{こうさく}たちは茅^{かや}の中へすっかり体を埋めて、長く駆け続けたことで荒くなっている息使いを調整しようとしていた。息使いはなかなか静まらなかった。そこから伊豆の山々が重なり合ってひろがっているのが見渡せた。よくもこんなにかくさんの山があるものだと思ふほど、山は無数に重なり合い、その果ては霞^{かすみ}んでいた。
(「しろばんば」)

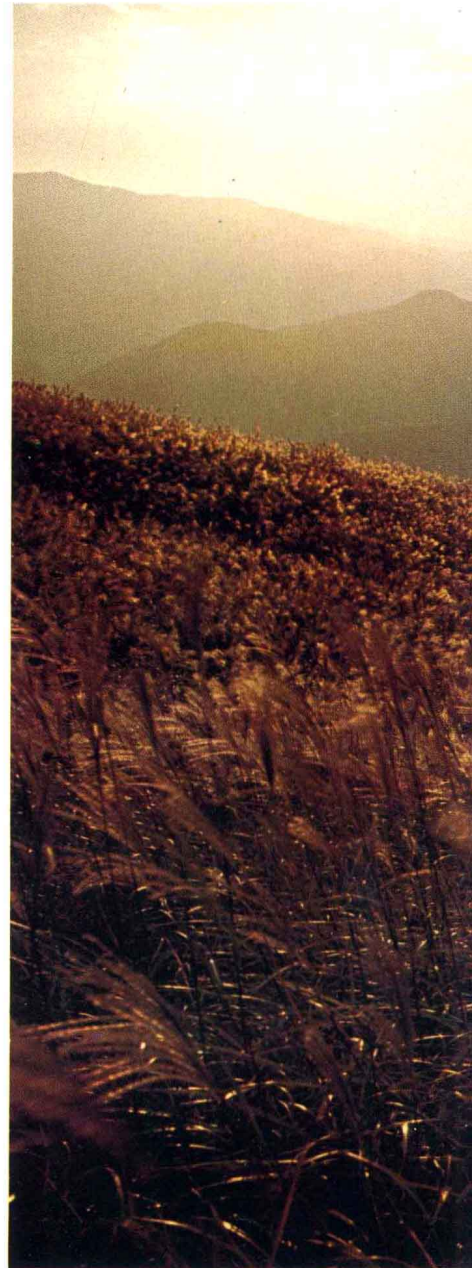


長野部落までいっきに駆け、それからその部落を抜けると、国土峠へ向かって走りぬぎに走った。少年たちの列は背後に砂埃を上げながら街道を走ったり、山の斜面の間道を伝ったりして、ひたすら馬飛ばしのある筏場を目ざした。子供たちは必死だった。一刻も早く行かないと、待ちに待った馬飛ばしが終わってしまいそうな不安が、絶えず彼らを襲っていた。
 (「しろばんば」)



▲上大見部落の筏場

国土峠の茅野原と伊豆の山々▶



曾祖父辰之助の妾であったおぬい婆さんと五歳の時から郷里湯ヶ島の土蔵で暮らすことになった洪作は、親類や部落の白眼視の中で耐えるおぬい婆さんと、一種の同盟関係ともいえるべき愛情の中で日を送る。母親と離れて暮らす洪作を優しくいたわってくれるのは母の妹の、若く美しい叔母さき子で、洪作も若い叔母を慕った。伊豆の大らかな自然を舞台にくり広げられる小学校五年までの日常生活を通じて、洪作が自然と人生への驚きと哀歎に目覚めていく様が描かれた自伝的長篇。



天城峠のずいどうは、洪作たちにはなんともいえず魅力のあるものだった。湯ヶ島部落から峠までは二里近くあったが、ずいどうを見に行くというとき、子供たちはその遠さを忘れて、いつもそこまで行ってみようという気になったものであった。洪作はずいどうの入り口まで行くと、そこに立って内部をのぞいた。ずいどうは石で畳んであるところも、地肌のむき出しになっているところもあり、三十メートルほどの長さの間、天井からはずつと水が滴り落ちていた。そのためずいどうの中の地面は湿っていて、ところどころに水溜りがあった。

（「しろばんば」）

……洪作はこの道を歩くのは二度目であった。この前と同じように、海を見降ろす坂道まで来ると、そこでしばらくの間三津の部落を見降ろしていた。洪作は今まで彼が知っている場所では、ここがいちばん美しいところではないかと思った。あるいは日本でいちばん美しいところかも知れない。めったにこれほど美しい景色を持っている場所はないだろうと思った。

（「しろばんば」）



夏草冬濤



沼津中学時代の靖にとって思い出深い遊び場となった沼津市内の狩野川河畔と香貫山 橋は黒瀬橋

洪作は浜松からの汽車で、天竜川も、大井川も、富士川も見えていたが、それ以外の川は見たことがなかった。併し、狩野川は大きい川のある静岡県でも大河の方であるし、大きさを別にすれば、静岡県では勿論のこと、日本でも有数の美しい川であるに違いないと、洪作は思っていた。

洪作は、そのことをいつもこの御成橋を渡る時思った。御成橋の上から見る眺めも、いかにも都会の川といった感じで、橋付近の両岸を人家や倉庫で埋め、その人家や倉庫の列が切れると、上流の方は青草に覆われた堤になり、そして川筋はゆるやかに大きく身をくねらせて視野から消えている。そして下流の方は少しずつ川幅を広くし、河口らしい貫禄を示して来る。

(「夏草冬濤」)



▲ 沼津市の御成橋と狩野川

父の転任で浜松一中から沼津中学に転校してきた二年生の洪作は、三島の伯母の家から通学するが、親許を離れて自由な空気を知った洪作の成績は次第に下りはじめた。やがて、一年以上級の不良がかった文学グループに接近して行くとともに、親類の美しい姉妹や、友人たちの姉によって、性も目覚めはじめる。三年生になると妙高寺に預けられた洪作が、猛勉強を決意して、友人たちと西伊豆の重寺へと旅立つところで終わるこの作品は、中学時代への愛惜が生み出した自伝的長篇である。





▼ 中学3年生の洪作が冬休みに湯ヶ島に帰る途中、軽便鉄道から見た大仁駅付近の狩野川



▲ 靖が沼津中学4年の4月から1年間下宿していた沼津の妙覚寺 洪作(靖)は、寺の娘郁子から、きびしくしつけられる。「あすなろ物語」では、溪林寺として登場する

妙高寺という寺はすぐ判った。寺の門の前で、文太は足を停めて、「いい寺じゃがな」と言った。いい寺だと言われても、洪作には、いい寺であるか、いい寺でないか、見当がつかなかった。「いい寺じゃがな。お前には勿体ない」
文太は言った。
(「夏草冬濤」)

もうあと一駅か二駅で終点の大仁だという時になって、突然狩野川は右手にその長い姿態の一部を見せた。狩野川は片側に小石を敷きつめた礫を抱いたまま、ゆるく大きくカーブを描いていた。……これが本当の狩野川だと思った。礫は弱い冬の陽に白く冷たく光っている。
(「夏草冬濤」)



◀伊豆月ヶ瀬部落付近から見る狩野川と天城連山

洪作は寒さに体を震わせながら、いつまでもへい淵の岸に立っていた。へい淵そのものは小さかったが、川瀬の音は以前のままだった。川の中には大小の石がごろごろしており、その石と石との間を、見るからに冷たそうな色をした水が、しぶきを上げながら走っている。

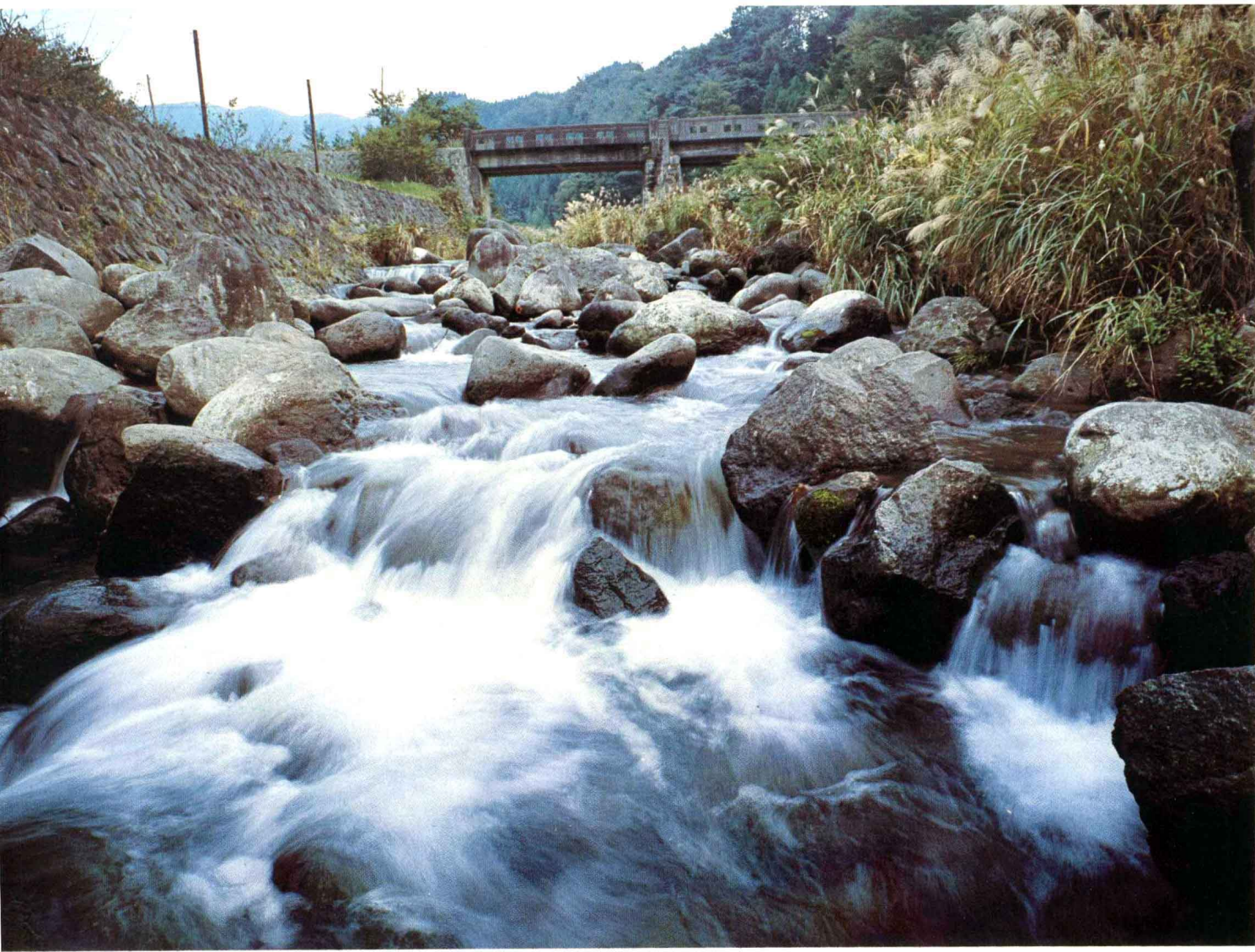
洪作は聞き耳を立てた。流れの音に混じって、微かに人声が聞えている。

（「夏草冬濤」）

天城が見える！
 洪作は口の中で言った。故里の山々を仰ぐ峻嶒な思いが、何とも言えぬ感動で洪作の五体をみたして来た。
 天城が見える！

（「夏草冬濤」）

▼狩野川の支流・長野川のへい淵付近の沢



北の海

電車から降りて何程も行かないうちに、洪作は道の左手に、赤煉瓦の建物があるのを見た。四高の校舎であった。

校門をくぐった。夏休暇にはいる筈であるが、それでもかなりの学生たちが出入りしていた。洪作は鳶永太郎のあとに従って、正面の建物を左に見て、建物を大きく廻って行った。

〔北の海〕

洪作は毎日のように無声堂で稽古をして、二部の部長とも親しくなった。そして誰が強く、誰が弱いとも、自然に判って来た。一年の部長と二年の部長と較べると、一年の部長の方に猛者が揃っていた。南、宮岡といった強豪のほか、何人かの有段者が居た。四高には初めて柔道着を着た連中も居たが、そうした連中の中では鳶と杉戸が目立っていた。

〔北の海〕



旧四高内にあった柔道と剣道の道場の無声堂
靖在学中、高専大会優勝への祈願をこめて連
日猛練習がなされたところ。現在は、愛知県
犬山市の明治村に移されている

明治の代表的建築物として重要文化財に指
定され、石川県立郷土資料館となって今に
残る、金沢・旧四高の赤煉瓦校舎「ここへ
来ると、私は、なんともいえない特別な気
持ちに襲われます……」という靖は、こ
こで昭和2年～5年まで学生生活を送った▶

大正十五年、沼津中学卒業後、高
校入試に失敗した洪作は、恩師宇
田の勧めで、両親のいる台北で勉
強する決心をしたものの、柔道部
で知り合った四高柔道部長から、
練習量がすべてを決定するという
四高柔道の模様を聞き、夏期合宿
参加を勧誘され、金沢に行く。洪作
は、青春を真剣に生きる四高生の
姿に感激し、四高入試合格の決意
を新たに沼津に戻るが、恩師から
再度台北行きを強制され、送別会
後、台北に旅立つところでこの自
伝的作品は終わる。柔道に人生の
最初の夢を託そうとした力作であ
る。

